



03

【写真解説】

01 神輿の胴に扉を打ち付ける小又さん 02 カタネボウ（担ぎ棒）に電動鉋（かんな）をかける浜上さん。カタネボウはアテの中でも特に堅いカナアテの生木を使う。切り出し、製材、加工、取り付けなどの一連の作業は、職人が最も神経を使う 03 作業場にはツバメの巣が4つあり、二人の作業を見守っている 04 小又さんの大工道具。機械化が進んでも最期は職人の手で仕上げられる 05 屋根の土台部分に芯棒がきっちり入るように穴を開ける 06 屋根周りの緩やかな曲線を鉋で作る 07 屋根の筋がはまる穴を鑿（のみ）で削る 08 台の飾りを電動糸鋸（のこぎり）で作る 09 部品はすべてヤスリをかけてから色を塗る 10 酒垂神輿の特徴でもある金色はブロンズ液に金粉を溶かして作る 11 吹きつけできないところは手作業で塗っていく 12 塗装はすべて黒で下地を塗ってから。マスキングをしてムラのないよう丁寧に塗る 13 祭り前日に神事が行われ氏子に引き渡された 14 棟梁、脇棟梁として30年以上コンビを組む小又さんと浜上さん。その作業効率の良さは、二人が長年培った経験とキズナの深さを物語る



14



13



神輿を作ることが
自分にとっての祭り。

脇棟梁
はまがみ よしひと
浜上 芳人さん

02



01

美しく、頑丈な神輿を。
職人のプライドにかけて――

あばれ神輿に込める

職人魂

小又工務店 棟梁 小又秀夫さん



能 登のキリコ祭りの始まりを告げる県指定民俗文化財「宇出津のキリコ祭り（あばれ祭）」。毎年7月第一金、土曜日に開催されるあばれ祭二日目の主役である酒垂・白山神社の両神輿は、その暴れぶりから「あばれ神輿」と呼ばれている。

暴れば暴れるほど神意にかなうとされ、八坂神社への入り宮まで、黄色いタスキをした屈強な男たちによって▽道路にたたきつける▽逆さにして回す▽川に落とす▽大松明にぶつける▽火あぶりにする――など神輿が壊れるほど暴れの限りを尽くす。

焼け焦げ、ボロボロになった2基のあばれ神輿は、それ

ぞれ職人の手によって毎年作り直される。その職人の一人である小又秀夫さんは今年、酒垂神社の神輿職人として21年目の祭りを迎えた。

6月中旬、八坂神社から作業場に運ばれた神輿は、芯棒や損傷の少ない一部を除いてほとんどが新しく作られる。

完成までに約3週間。主に神輿の強度にかかわる部分を小又さんが、塗装や加工などを脇棟梁の浜上芳人さんが担当する。小又さんのこだわりは「細かい部品まで妥協しないことと担ぎ手がケガしないよう頑丈に作ること」。

二人の職人が魂を込めて作る金色のあばれ神輿。その制作現場に密着した。

12



11



10



09



08



07



06



05



04



← 神輿職人の「手」に迫る